

# 呉趺人の悪玉小説に見られる トリックスター性

——「発財秘訣」を中心として——

松 田 郁 子

## 1. 悪玉小説

呉趺人（1866-1910）は、1903年から1910年の間に未完の作品も含めて創作、翻案、改作合わせて十六篇の中、長編小説を書いた。題材で見ると歴史もの二篇、恋愛もの五篇、多岐に渡る社会事象を描いたもの九篇となる。恋愛ものは三篇が改作と翻案なので、純然たる創作としては社会事象ものが大半を占めることになる。呉趺人自身はそれらを‘社会小説’と呼んでいた<sup>1)</sup>。その内容は政治、経済、時事、世相、思想、教育、科学、信仰等広範囲に渡る。不屈の英雄や逆境のヒロインを描く歴史ものや恋愛ものに比べると社会事象ものには悪役が目立つ。便宜上、作中世界で肯定的評価を与えられている者を善玉、善玉に敵対する人物として設定された者を悪玉と呼んでおく。さらに、はじめから敵役として登場する悪玉を通常の悪玉と呼んでおく。社会事象ものに於いては、通常の悪玉のほかにトリックスター（P. ラディン他『トリックスター』<sup>2)</sup>によると、全世界の神話、民話に分布する道化的キャラクター。秩序や権威に従わず欲望のままに既成の価値を破壊しながら新たな価値を生み出していく行動様式、狡猾で残酷かつ無邪気で滑稽な性格を特徴とする）型の悪玉（以後トリックスター型悪玉と呼ぶ）が見られる。‘社会小説’を意図した作品における人

物形象の設定には作者の社会認識が投影されているはずである。そこで本稿ではそのようなトリックスター型悪玉の人物形象について考察してみたい。

呉趼人の社会事象もの小説にはトリックスター型悪玉がしばしば登場する<sup>3)</sup>。なかでも注目されるのは主役を始めほとんど悪玉しか出てこない小説に登場する悪玉である。それら善玉主人公や敵役となる通常の悪玉のいない小説ではトリックスター型悪玉がストーリー進行上の中心人物となる。悪玉ばかりの小説として挙げられるのは『糊塗世界』<sup>4)</sup>(1906)「発財秘訣」<sup>5)</sup>(1907-1908)『近十年之怪現状』<sup>6)</sup>(1909)である。この三篇に題材や形式上の共通点はない。『糊塗世界』十二回(未完)は概ね二、三回毎に場所、人物、ストーリーを変えて各地官界の腐敗を描いている。「発財秘訣」十回は中心となる人物のサクセスストーリーを展開しながらその周辺にいる拝金主義者たちの生態を合わせ描いている。『近十年之怪現状』二十回(未完)は各種階層職種にある知識人の悪事を描く。この三篇で作者は悪玉側の発想から成る社会を描くという構想を打ち出しているように思われる。ただ『糊塗世界』『近十年之怪現状』は未完であるうえに短編の集まりで主役を特定できず作者の構想を論定し難い。そこで主役が特定でき物語としても完結している「発財秘訣」について考察してみたい。

## 2 時代背景と場面の構成

この作品は「社会小説 発財秘訣(一名 黄奴外史)」と題して雑誌『月月小説』11号から14号(1907.11-1908.2)に連載された。章回体形式を採り全十回で完結している。

第一回始めに先ず

過ぎにし日を思い起こしますと涙がしとどあふれてきます。十人に九人は虚け者ゆえ、同じような大丈夫がどうしてもこの中から主人と

下僕を判定しようということになるのです。

ああ、皆々様、風気！ 風気！ 風気って何だろうということになりますと皆々様によればもちろん文明だとか学問だとかいうことになるでしょうが、それが違うのだとご存じない。小生の思うにただ‘利’という語こそ風気なのです。しかも‘利’という語以外にいわゆる風気というのはないのです。皆々様、嘘だと思ふなら私の話をお聞きください。

(往事追回泪似珠，十人中有九糊涂；致令一样须眉汉，硬要从中判主奴。呵，呵，诸公！风气，风气，甚么叫做风气？据诸公说，自然是文明学问了。不知非也，据小子看来，只一个“利”字便是风气。而且除“利”字以外，更无所谓风气者。诸公若不相信，听我道来。)

という作者の口上が述べられる。作者はこの口上で作品が拝金主義の時流を主題としていることを明らかにしている。作品に描かれる時間は第二次アヘン戦争（1856）<sup>7)</sup> 敗戦までの数年間，その十数年後から曾国藩，李鴻章の留学章程上奏（1872年2月）まで，場所は香港，広東，上海である。先ず第一，二回で『明史』の記事を引き広東におけるヨーロッパ人との通商の歴史，アヘン戦争の敗戦（1840）で割譲された香港が発展するにつれ香港への出稼ぎが盛行し出稼ぎ成金が出現するという社会背景が述べられる。続けて香港への出稼ぎを思い立った区丙という人物が資産を築くまでの経緯が描かれる。第三回は数年後の香港と広州を舞台に，両広総督葉名琛<sup>8)</sup> が第二次アヘン戦争（1856）の最中に扶乩<sup>9)</sup> に耽る様と，区丙が戦局を金儲けに利用する様を対比して描き，広州陥落に至るまでの戦況を詳述する。第四回以後舞台は約十数年後の香港，広東，上海となる。区丙の息子阿牛が外国語を習おうとして‘洋財’（外国絡みの儲け）を狙う陶慶雲や魏又園，花雪畝等の若者と知り合う（第四回前半～五回前半）。第五回後半からは花雪畦が富豪になるまでの顛末がストーリーの中心となり，第

九回まで花雪畦を軸に周辺にいる拝金主義者たちの様態を描く。最後の第十回前半で彼らと立場見解を異にする冷雁士という人物がはじめて登場し、拝金社会についての解釈を述べる。

このように虚構の人物である拝金主義者たちによる虚構のストーリー（第一回後半～第二回，第四回前半～十回）の中に、歴史上の人物に関する史実を数箇所——アヘン戦争と広東，香港の通商史（第一回前半），第二次アヘン戦争と葉名琛（第三回，第十回前半），曾国藩，李鴻章の洋務政策（第十回前半）——を挿入するストーリー仕立てとなっている。第八回末の「作中人物を自分はすべて知っている」という評語には，事実と虚構の境を曖昧に見せようとするかの如き意図が窺われる。

第十回前半になって李鴻章，曾国藩が百数十名の若者をアメリカに留学させるというニュース（1872. 2）<sup>10</sup>が話題に上り，買弁の陶慶雲が「これで中国も良くなる」と喜んで「件の年広東省都を失った例の総督は翰林出身宰相だったが何故外国人に敵わなかったのか。私が総督で敵軍将校と話し合えばこんなことにはならなかった。だから中国の文字などどうでもよいしいっそ中国語など話せなくてもよいのだ」と第三回に描かれた第二次アヘン戦争における葉名琛の敗北（1856）に話を振る。それを聞きとがめた落魄知識人冷雁士が，葉名琛のみならず「琦善，牛鑿，伊里布，耆英」<sup>11</sup>ら「穀潰しの学者」たちが「時事を知らず」敗戦を重ねたあげく南京条約が締結されて通商成りそのお蔭で皆さんが金儲けに勤しめたのでしよう，とあてこする（第十回前半）。ここではじめて第一，三回に述べられているアヘン戦争と第二次アヘン戦争に関する故事が第四回以後に展開する虚構のストーリーと因果関係にあったことが明らかにされる。作品に描かれてきた人物事件が連載の最後に一点に収束し，アヘン戦争並びに第二次アヘン戦争での敗戦に由来する拝金主義の蔓延，という作者の歴史観が結ばれるのである。作者が最終回ではじめて提示した拝金社会の構図は，そこまで読み続けてきた読者に強烈な印象を与えたと思われる。

### 3 人物設定とストーリーの展開

ストーリーの中心となる人物は第一回から四回前半までは区丙，四回後半から九回までは花雪畦である。この二人を中心に陶慶雲，魏又園ら周辺にいる拝金主義者が登場し金儲けについての話題を膨らませる。最後の十回で儒教倫理に則って生き慈善行為に勤める冷雁士と彼に金儲けの本質について分析して聞かせる占術士知微士が登場し拝金主義者と対立する。「発財秘訣」の人物設定上の特徴は，拝金主義の時流に乗ろうとする拝金主義者たちの価値観と生き方を描いてストーリーが展開し，最後に彼らへの批判者である「時流に見放された」落魄知識人冷雁士の価値観と生き方が描かれている点にある。

各回の末尾には平均二，三百字の評語が記されている。作者のことを‘余’‘吾’‘吾輩’‘著者’‘作者’，読者のことを‘閱者’‘読者’と回により異なる用語を用い，同じ回の評でも段落が変わると用語が替わることもある。雑誌連載時には評者が作者と別である場合には作品作者名の次に某某評と記されることが多いがそのような記載もない。作者周辺の友人，編集者等が原稿に書きこみを加えるケースなどもあり得たと思われるが，基本的に作者自身が評者であったとしてよいだろう。さらに，作中随処（連載時は紙面の天部即ち本文より上，単行本では本文の後ろ）に平均十文字前後で作中人物の発言や行為を揶揄する科白形式の眉語が冠せられている。やはり発言者名の記載はない。それらのほぼすべてが拝金主義者の言動（第三回末両広総督葉名琛に関連する楽府と詩を除く）を対象としている。例えば，洋行店員から買弁に出世した陶慶雲は外国人の要求にはすべて従い若い頃はこんなことまでやったのだと魏又園が花雪畦にその内容を耳打ちする（第七回前半）。その箇所には「結局どんなことだったのか，気がもめることだが想像はできる」と眉語が冠せられ，さらに回末評語でも「魏又園が陶慶雲について語ったことは金儲けの秘訣の重要機密に違い

ない、耳元で囁いたのでついにこの秘訣のみ伝わらなかったのは惜しいことだ」と繰り返し取り上げられている。眉語評語は各回とも、拝金主義者を傍から眺める観客の立場、揶揄嘲笑の語調を採っている。

それら拝金主義者をはじめとする登場人物の言動を場面ごとに見ていくと、先ず第一回から六回前半まで場所は香港と広東、第三回までの中心人物は区丙である。第一回、二回の舞台は香港で、アヘン戦争以後の通商が開けた社会状況を背景に商機を掴んだ区丙が財を成す。

第三回は第二次アヘン戦争が背景となる。区丙は香港に雑貨店を広州に舶来雑貨店を構え親族食客を養う富豪となっている。ある日、以前に食客として匿った凶状持ちの関阿巨が英軍大元帥額爾金伯爵の間諜となって現れ軍備や防戦の情報収集と提供を区丙に依頼する。区丙は両広総督葉名琛が扶乩を妄信し役所でも日がな一日神仙を拝んでいるという情報を流す。関阿巨の進言を容れて英軍は広州湾に張子の大砲を投じ沿岸を騒がせ敵陣を攪乱する。葉名琛は、清軍侵攻の際に江南の住民が神前の青龍刀を水中に投げ浮けば抗戦と決めて神託を仰ぐと刀が浮いたので抗戦し清軍に殲滅されたという故事に鑑み、清軍に吉兆と喜んだ。自身も扶乩に訊ねると‘十五日無事’の託宣を得たので‘十五日間は何事もない’と部下や郷紳の進言を悉く斥け防戦を怠る。区丙がまたその情報を流すと英軍は十三日目に攻撃を開始し十四日目に省都を陥落させ葉名琛を捉える。区丙は突然の英軍侵攻に混乱する広州で関阿巨の手配により早々に店舗営業証明を得て一人利益を得る（第三回）。第二次アヘン戦争時の両広総督葉名琛と英軍を指揮した額爾金伯爵は歴史上の人物であるが、関阿巨、区丙は虚構の人物でその売国行為及び張子の大砲作戦部分は作者の創作と思われる。葉名琛と扶乩にまつわる逸話は広州陥落後に葉名琛を非難して書かれた実在する樂府三篇の内容に拠っている。色々な野史類<sup>12)</sup>に収録されている葉名琛の逸話も概ね同じ樂府が典拠となっているようである。作者はその三篇の樂府と葉名琛の詩作二首を「『中国秘史』<sup>13)</sup>収録の詞句」と断って延々

と引用し、回末の評語に代えている。

十数年後に、区丙の店に陶慶雲という十八歳の若者が洋行支配人のお供として現れる（第三回末）。区丙の意向で外国語を習おうと志した区丙の息子阿牛を繋ぎに時代と人物は次の世代に移行する。洋行の書記を自称する陶慶雲は実は大部屋住まいで自ら茶を淹れベルに呼ばれて伺候する走り使いにすぎないが、咸水妹（外国人相手の娼婦）の娼婦宿に居ついて語学力を磨き‘洋財’を掴む野心を燃やしている（第四回）。陶慶雲を訪ねた阿牛は娼婦宿で陶の兄の秀干、友人の魏又園、花雪畦と知り合う。間もなく陶慶雲兄弟と魏又園は‘洋財’を得る機会により恵まれている上海に出立する（第五回前半）。

以後第五回後半から十回までは外国語ができず香港に残った花雪畦が中心人物となり、場所は広東、香港から上海に移る。花雪畦は米屋の雑役で得た稼ぎを賭場で増やそうとして失敗し、次に豚の去勢屋蔡以善の子豚を盗んで捕まる。広州で‘遊刑’（広東流市中引き回し刑）に処されたところを阿牛に救われ（第五回後半）香港に逃げた花雪畦は、賣猪仔業（中国人を誘拐拉致して米国や東南アジアの鉱山、農場等の労働者として売る人身売買組織）に参入し数年間に三千元余りも稼ぐ（第六回前半）。ところが悪事が露見して上海に逃れ、六回後半以降舞台は上海に移る。

上海で花雪畦は旧知や新たに知り合った拝金主義者たちの行状をつぶさに見聞する。陶慶雲は外国人には正直誠実を心掛けて信用を得、洋行の副買弁に出世している（第六回後半）。折しも彼が花雪畦たちを招待した宴席に正買弁死去の知らせが届くと、皆で祝杯を揚げる（第八回前半）。

舒雲旃は陶慶雲の入れ知恵で他人の墓地を勝手に外国人の永代借地に転用し強引な地上げを図る（第六回後半）。彼は酒樓の女将森娘の情夫で彼女の息子杭阿宝を買弁にするために外国語を習わせている（第八回前半）。

陶慶雲の兄たちは茶業者には品不足と偽って売り惜しみさせ洋行には品余りと偽って買い控えさせ相場を操作しながら買い叩き茶業者たちを破産

や自殺に追いこむ（第八回前半）。有能な買弁は親戚友人知人の職を奪ってでも複数洋行の買弁を兼任して儲け口を増やす。

豚の去勢屋蔡以善は上海に来て洋行の召使になる。店主は彼の儉約ぶりを気に入り外国語を習わせ不足気味であった買弁に取り立てる（第九回前半）。

腕が悪く仕事のなかった大工の言能君は、博打で立て続けに当てて外国人御用達の建築屋を開業する。彼は金持ちになるとも賭場仲間の魏又園との付き合いを止め金を貸さない（第九回前半）。

魏又園は隣家の咸水妹に通う外国兵船航海士に無給で仕えて取り入り（第七回前半）、兵船の召使に雇われ（九回前半）、数年後伝手を得て買弁となる（九回後半）。

端木子鏡は巡防局百長の職の傍ら店を経営し成金たちに公務上の便宜を図っている（第九回後半）。

買弁になった森娘の息子阿宝は賭場仲間の劇場客席係を金持ちに顔が利くという理由で相棒に抜擢し成功する。阿宝の同級生孫三宝も何故か彼を気に入った洋行店主の養子となって外国語を習い公職を得るなど、若い世代もうまく立ち回っている（第十回前半）。

彼らの所業に金儲けの奥義を学んだ花雪畦は、袁という同郷人と共同経営で米屋を開き四、五年後袁が死ぬとその資産を奪い富豪となる（第九回後半）。

このように、第十回前半まで金儲けしか眼中にない拝金主義者の処世術が描かれ、最後に花雪畦の店の書記冷雁士と「人品卑しからぬ」八卦見の知微士が登場する。冷雁士は伝統倫理に忠実な落魄知識人で、第十回後半は彼の行き方と知微士の所見を述べて作品が締め括られている。冷雁士は花雪畦の開店祝いの宴席で陶慶雲と論争し、蓄財能力のみで人と社会を値踏みする拝金主義者たちの話に慨嘆する（第十回前半）。宴席を抜け出し知微士に財運の有無を尋ねると、知微士は冷雁士の生辰八字（生年月日時



の干支)を鑑定してこれまで財運は巡っていたはずと答える。冷雁士は潤筆料、月謝などで十六歳から三十六才までに一万金を得たが親の葬儀を行い、兄弟四人の学資と独立を援け、救貧施設に寄付し、貧乏知県のまま死んだ叔父の公私の負債を処理して遺族を救うなどに費やして食い詰めたという人生行路を語る。聞いた知微士は次のように答える。

閣下は読書人なのに天に従う者は生き逆らう者は滅ぶとご存じないのですか。座して二十年間に一万金も得た閣下への天の待遇が厚くないとはいえません。閣下が天の賜を受けなかったのです。その一万金で貴人に諂い仕官の道に財を得ようとせず、商いに勤しみ権謀術策で財を得ようともせず、ましてや高利で人から搾り取ることもなくこのように浪費したのです。

(閣下是个读书人，岂不闻顺天者存，逆天者亡？二十年中坐致者已达万金，天之待阁下者，不为不厚，阁下乃天与勿取，既不肯持此万金去巴结贵人，从仕路上发财；又不肯经营商业，从权术上发财，更不肯重利盘剥，向刮削上发财，却如此浪用。)

知微士は、資産を得ても「人倫道德」に「浪費」したのでは餓死の日は近いと冷雁士を諭し、「財を成したければ速やかに閻羅大王と相談して人心を抉り取り獣心に取替えなさい（你若要发财，速与阎罗王商量，把你本有的人心挖去，换上一个兽心）。」と忠告する。それを聞いた冷雁士はたちまち心の中がすっきり冴え渡り（‘登时满心透彻通明’）一礼して鑑定料を置くと山中に隠れ行方も知れず、ここで作品は終わる（第十回後半）。富豪になるには「獣心」が要ると勧告されて金儲けの可能性を断念し遁世を選択するという結末に拝金主義社会を否定する作者の価値観が投影されているといえよう。

#### 4. 区丙と花雪畦のトリックスター性

作中に登場する拝金主義者たちのうち、中心となる存在は区丙、花雪畦である。彼らは語学力なしで蓄財した異例の成功者として成金たちの間でも特別視されている（第五、九回）。九回評語では花雪畦を発財の奥義を身に付けた人物と述べ、作品末尾の第十回評語は区丙と花雪畦の行為をその他の拝金主義者たちに優先して描いたと述べている。この二人の人物形象に見出せる突出した要素はトリックスター性である。彼らは相手を出し抜く独創的発想、禁忌を畏れない欲望追及の姿勢、滑稽尾箆な振る舞いで笑いを誘う道化的個性など、前掲書著者がトリックスター型として分析した性格類型に相応する特質を持っている。次にそれらの側面に焦点を当てて区丙と花雪畦が資産を築く過程を具体的に見ていきたい。

先ず区丙について見てみると、彼は外国人の珍重しそうな廉価の特産物を新興都市香港で売るという斬新な着想により成功する。最初区丙は香港で‘料泡’（半円球状の薄い碗とストロー状の細い円管を組み合わせたガラス製のラップ）を売ろうと思い立つ。料泡を行商しようとする区丙を香港に住む広東人たちが「こんなものを売っても足代にもなるまい」と嘲る場面から、それが人の意表をつく着眼であったことがわかる。ところが相場を知らない外国人が高値で買い、吹き方が分からないので吹くとすぐ壊れまた買い替えるのでぼろ儲けとなる（第一回後半～二回前半）。

区丙は次の売れ筋商品として棗の種大で将棋、操船、農作業等の所作を活写し風景、建物、道具も揃った精巧な石湾地方特産のミニチュア陶人形に目をつける。自国での売り物や贈答品にしようとする外国人が争って買い日に数千個も売れたので、区丙は数ヶ月で巨万の富を築き行商をやめ香港と広州に店舗を構える（第二回後半）。第二回評語は区丙の独創性を高く評価している。

なべて実業をなすものは創作に携わるにせよ販売に携わるにせよ時運を眺め随時改めていけば永く栄えるものだ。いつも思うにわが国の人間は何業に携わろうと旧法を墨守し頑固に改めず衰退に甘んじているのは嘆かわしい限りだ。区丙という一行商人は時運を眺め世の嗜好に応じる力があつたのだ。嗚呼！ その富を僥倖と言うなかれ。

(凡事業家，无论为操艺术者，操转运者，皆当默察社会风气，随之转移，然后其业可久可大，每怪吾国人无论所操何业，皆一成不变，甘心坐致败坏，是则大可哀者也。区丙一小负贩，乃能潜窥默察，投其所嗜好者，嗚呼！母谓其富为僥致也。)

次に区丙は英軍の情報屋となり、店に来る役所の幕友たちをもてなして広東官界の動向や防戦配備の情報を聞き出し英軍に売る。はじめ英軍間諜の関阿巨から情報提供を依頼された区丙は月に五十元の基本給と一件につき五十元の情報料という副収入を店番ついでに得られるという経済効率の良さに魅かれ快諾する。売国という禁忌的側面への懸念は欠片もなく欲望のみを追及する態度はトリックスターの典型的性格を表しているといえる。

区丙とその妻は小心で滑稽な道化役として描かれている。香港での行商を思い立った区丙に妻は特技も腕力も語学力もなしに香港で稼ぐのは無理だと反対する。腹を立て妻に黙って香港に出た区丙ははじめて外国人に話しかけられ「恐怖の余り真っ青になりぶるぶる震えが止まらない（第一回）。」すったもんだの末に行商が軌道に乗ると毎日の売り上げを寝台下に隠し、三ヶ月後蓄財できたお礼の品を神前に供えるのだと妻を買い物に行かせる。妻は鶏でよいとけちるが区丙はボンと五十元を渡し上等の豚頭、牛、羊を供えさせる。妻は羽振りの良くなった夫の呼び方を‘あんた’（‘你’）から‘旦那様’（‘当家的’）と改め甲斐甲斐しく酒肴の世話をする。衣装代をねだると気前良く十元くれた夫に妻は一元失くしたと偽りもう一元せしめてほくそえむ。みみっちいやり取りをしながらいよいよ寝台

下の蓄財を取り出し数えてみると銀五万両にも達していた（第二回後半～三回前半）。

次に花雪畦について見ていきたい。花雪畦ははじめ米屋の雑役をして食い扶持を得ていたが賭場で摩り、次に子豚を盗んで捕まり市中引き回し刑に処され素寒貧で香港に逃れる。そこで賣猪仔業に目をつけると、賭け仲間の阿三に頼んで賣猪仔館の店員高阿元に渡りをつける。花雪畦は広東新安で賭場を開き摩った客に返済するための働き口を世話すると偽って高阿元の店へ行かせ売り飛ばすという手口で三千銀余り蓄財する。しかし、公金を摩って途方に暮れる新安知県の坊ちゃんをそれとは知らずに売って手配され上海に逃れる（五回後半～六回前半）。

上海で拝金主義者たちの悪辣な手口を見聞して金儲けの奥義を会得した（六回後半～九回前半）花雪畦は自分が三割、袁という同郷人が七割の出資で米屋を開き繁盛する。袁は吝嗇で郷里の家族を呼ばずに一人住まいし友人知人もいない。花雪畦が付け入ろうと隙を窺っていたところに袁が流行り病で急死したので、合資契約書を焼却し店を乗っ取る。さらに袁の私財を入れたトランクを開けて金品を奪った後で郷里にいる袁の息子と呼び、米屋は赤字で資産のない袁の残した借金を代わって返済せよと強要する。花雪畦は言能君、端木子鏡ら官界に伝手を持つ拝金主義者たちと徒党を組んで息子を脅し泣き寝入りさせる（第九回後半）。また、落ち目の友人は金を無心しがちなので付き合うまいと決意し、魏又園が金を借りに来る約束の時間にわざと外出する（第九回前半）。このような摩った賭場客を猪仔に売るという手口の独創性や自国民、同郷人、友人を裏切る非倫理性は、社会的禁忌に囚われないトリックスター性を端的に表しているといえよう。

花雪畦の言動は終始滑稽尾箆、道化的である。蔡以善の子豚を盗んで市中引き回し刑に処された花雪畦は、裸で縛られ子豚を抱えた姿で街を引き回され銅鑼の音に合わせて鞭打たれる。解放されると便所に行き尿で傷を洗い痛み止めをする（第五回後半）。後に上海で買弁になった蔡以善と再

会してたじろぐが知らぬ振りを決めこむという落ちもつく（第七回後半）。また外国語を覚えようとして外国文字どころか漢字も知らないのに魏又園にアルファベットと読みを紙に書いてもらい数日間睨んで頑張ったもののABCの区別もできずに諦める。宴会の招待状が来ると招待者と自分の名前のほかに知る文字がなくて宴席の場所を探し歩く（第七回前半）。

区丙は「料泡で富豪になった区旦那（第四回）」と十数年後にも名を知られ、花雪畦の成功は「十人中一人もいない（第九回）」と成金たちの中でも一目置かれている。また区丙の保護した凶状持ちの関阿巨が英軍間諜となり、息子阿牛の救済した花雪畦が賣猪仔業で成功し、官界に渡りを付けた拜金主義者たちが花雪畦の横領行為に加担して徒党を組む。そのように彼らの行為は社会を動かし歴史の方向性を定める一要素となっているといえる。前掲書でP. ラディンは、トリックスター像は「古代の原初的過去の漠然とした記憶」の表現であると共に「各個人にある区別されない現在」の表現でもあるとしている。またK. ケレーニイは「ピカレスクな神話」「文学以前の文学の源泉」、C. G. ユングは「ひとつの最も古い、元型的な心の構造」を模写した「集団的人格化」と分析している。トリックスターを、古代より現在まで受け継がれてきた心の原型の表現でありその集団の意識の人格化とみなせるもの、と理解するならば、「発財秘訣」に描かれたトリックスター型悪玉像は、作者の眼に映った当時の中国社会を人格化した影像であったといえよう。

## 5. 作者の視点

区丙と花雪畦のような‘トリックスター’を作者はいかなる視点に立って描いているのだろうか。

最後の第十回後半で知微士が‘発財’を「獣心」の所為と告げ冷雁士が人倫道德を遵守する自身の生き方は時流に合わないと感じ遁世する急激なストーリーの反転は何を意味しているのだろうか。落魄しながらも世過ぎ

に勤め財運の有無を気に懸けていた冷雁士を隠遁に踏み切らせたのは知微士の「人心を抉り取り獣心に取替えなさい」という言葉だった。作中で「獣心」の語が使われているのはこの一箇所だけであるが、それまでの数箇所に「狼心」という語が使われている。

ある富豪の言うには「金を儲けたいなら残忍で悪辣でなくてはならない」そうなの。

(闻诸某富翁言, 若要发财, 非狼心辣手不可。)(第六回評語)

陶慶雲は言った：……世の中の残忍でない者は一生かかっても金を儲けることはできない。

(……‘须知世界上不狼心的人一辈子也不能发财。’)(第八回前半)

ある成金の言うには「金を儲けるのは実に簡単なことだが愚か者には分からないのだ」そうなの。「何で簡単なのです」と聞くと「心が残忍で、目が利き、手が速ければよい」のだと。目が利き、手が速いは才智の問題であり、やればできるかもしれない。心残忍となると道德の問題であって、それが我輩のずっと貧乏である所以か？

(闻诸某暴发家之言曰：“发财是极容易之事，世人自愚而不觉耳。”

问：“何谓容易？”则曰：“只须心狠，眼明，手快耳。”眼明，手快关夫才智，或尚可学而致之，至于心狠，则关夫道德，此吾辈之所以终穷也乎？)(第八回評語)

それまで道德心の対立概念として用いていた「狼心」を、作者は、作中人物最後の台詞となった知微士の言葉では「獣心」と言い換えたと思われる。冷雁士が命運鑑定を依頼する場面にも登場する八卦見知微士の言葉は作品世界に於いて人と世を判定する役割を担っているといえよう。冷雁

士が‘獣心’の語に拝金社会の成り立ちを悟り隠遁する結末には、獣心により成り立つ拝金行為及び‘利’のみ追求する‘風気’を非道德と否定する作者の価値観が表れているといえる。

さらに第八回評語は次のように続く。

天道の説とは志を得ない者のためのつまらぬ言い逃れにすぎない、世の中には人事あるのみ天道などないと常に言ってきたのだが、そうとばかりもいえないのだ。「発財秘訣」で述べた人々を私は皆知っている。その子孫を見ればいわゆる天道とはたしかに存在するかのようである。これもまた不思議なことである。

(尝谓天道之说，不过为失意者无聊之谈助；世上惟有人事，无所谓天道也。然亦有不尽然者，一部《发财秘訣》，所叙诸人，吾皆知之。默察其后嗣，则所谓天道者，若隐然得而见之，是亦一奇也。)

‘天道’とは、この作品中では人心を獣心に換えるよう頼む相手として知微士の挙げた‘閻羅大王’（インドのヤマ神，仏教の閻魔大王，中国では人の生前の善悪を判定し地獄を管理する裁判官）の如き人事を超越した絶対的存在の裁断を指していると思われる。作者は‘狠心’から‘天道’へと話題を進めることで、残虐な富豪の子孫は天道の差配により志を得ないと読者に訴えているかのようなのである。希代のトリックスター型悪玉の登場する小説『瞎騙奇聞』<sup>14)</sup>でも、作者は、悪玉の所業のもたらした重大な結末として関係者の子孫の杜絶を挙げ連ねている。清末の多くの読者にとり家門の隆盛は未だ最重要課題であったはずである。拝金主義とその蔓延する社会に異議を申し立てようとする場合、家系の凋落，断絶はそれなりに有効な警句となり得たであろうと思われる。

第九回評語では、客死した同郷人袁の資産を横領し貧しい友人魏又園を避ける花雪蛙の所業を挙げて「富豪となる資格を備えている」と評し、

「士君子が友人をわが命と考えるようなことは、実に、貧相な乞食のなすことにすぎぬのだ、悲しいかな！」（若士君子之以朋友为性命者，实穷相乞儿所为耳。悲夫！）と述懐している。第八回，九回の評語は，作者が当時の社会状況を，不道德であれば富豪となれるが次代に続かない，道德を遵守し士君子であろうとすれば乞食となる，いずれも救われない，と分析していたことを表している。作者吳趸人の経歴をしてみると，官憲の干渉に抗議して『漢口日報』を辞任してから小説家に転じ作品中で官界の腐敗，阿片や迷信の害，女子教育の必要，救亡等を訴え，排露運動，反米華工禁約運動，不纏足会など社会改革運動に参加した末，儒教道德の復興のほかに救亡の策はないという持論<sup>15)</sup>を展開するに至る。また，一族を養って困窮に陥るという作中の冷雁士と似た体験の持ち主でもある。儒教道德を行動規範とする冷雁士像は作者自身の投影であったといっていよう。「悲しいかな」という感想には，道德心が廃れ狼心，獣心の所業の横行する拝金主義社会を否定する作者の心情が吐露されているといえよう。

#### 〔註〕

- 1) 社会小説／〈「近十年之怪現状」自叙〉〈宣統元年（1909）〉で「九命奇冤」「発財秘訣」「上海遊驂録」「胡宝玉」を社会小説として挙げている。
- 2) 『トリックスター』／P. ラディン・K. ケレーニイ・C. G. ユング著（皆川宗一・高橋英男・河合隼雄訳 1974. 9. 25 晶文社）。

該書によると‘トリックスター’とは全世界の神話民話に分布する道化的キャラクターをいう。ギリシャ神話のヘルメス，北欧神話のロキ，日本神話のスサノオ，ヨーロッパ中世の道化師などにその特徴が指摘されているが，P. ラディンによると，最も原初的トリックスター像は北アメリカ原住民ウィネバゴ族が神話ないし英雄譚として語り継いできた物語群の中の‘ワクジュンカガ’とか‘うさぎ’と呼ばれる道化的ヒーローに顕著に留められている。トリックスターは「創造者であって破壊者」「贈与者であって反対者」「善も悪も知らないが両方に責任を持つ」「他を騙し自分が騙される人物」という両義的性格を備え原初的人間の意識を象徴する。その無意識，衝動的な行動は「道徳的あるいは社会的な価値を持たず情念と食欲に左右されている



が、その行動を通じて、すべての価値が生まれて来る」と P. ラディンは定義している。

- 3) 吳趸人の社会事象もの小説中のトリックスター型悪玉／印象深い人物を挙げてみると、二篇の悪玉小説では、「近十年之怪現状」（二十回）で最も多くの回に登場する山東調査委員魯徽園は上海で調査協力者の金を着服して天津に逃走する。改名して商人となり軍服斡旋の商談を成立させるが洋行に契約金を詐取される。髭を剃り変装して北京に潜伏、後に済南に帰りもとの名で官職に就き贈賄追従に専念して新総督の新任を得る。その間魯徽園に一杯食わせる伊紫旒、田仰方、柏養芝なども登場する。『糊塗世界』十二回で第五回の盗賊団は旅回りの弾子語り一家を装い同宿の役人を自室に誘い出して饗応し役人の部屋から公金を奪う。ほかに『二十年目睹之怪現状』第五十五回〈光緒三十二年（1906）〉では外国帰りの中国人西洋医が薬局を開店し、賭博で成り金となった富豪が十万銀を投資する。西洋医はその資金で大量の薬瓶を買い付けた後、行方をくらます。瓶の中身はただの水だった。成金は官職を買って搾取していたので彼を憎む人々は喝采を叫ぶ。第八十回〈宣統元年（1909）〉～八十一回〈宣統二年（1910）〉に登場する占い師は四川の富豪の娘に皇后の気があると託宣し食客に納まり、皇帝の気を持つ婿を探す大芝居を打って探し当てた樵を婿に迎えさせる。
- 4) 『糊塗世界』／（十二回未完）原載光緒三十二（1906）年『世界繁華報』。雑誌版の詳細は未詳。同社より単行本で出版。『吳趸人全集』第三卷（1998年北方文芸出版社）版を使用。
- 5) 「発財秘訣」／（十回）雑誌『月月小説』11～14号〈光緒三十三年（1907）十一月～三十四年（1908）二月〉に連載。同4の版本を使用。
- 6) 「近十年之怪現状」／（二十回未完）別名「最近社会齷齪史」。宣統元年（1909）から『中外日報』に不定期で連載。宣統二年（1910）単行本で出版。同4の版本を使用。
- 7) 第二次アヘン戦争／アロー戦争、アロー号事件ともいう。咸豊六年（1856）、広東港で清国官憲が香港籍船アロー号の中国人乗員を海賊容疑で拘束しイギリス国旗を引き降ろしたことが発端となった。中国全域への貿易開放を求めていたイギリスが出兵を強行、広東省城を攻撃すると、翌年、フランスも宣教師殺害事件を口実に参戦した。英仏聯合軍は広州を陥れ、同八年（1858）天津、同十年（1860）北京を占領したので清廷は和議に応じ天津条約、北京条約を締結した。
- 8) 葉名琛／嘉慶十二年（1807）-咸豊九年（1859）、湖北漢陽出身。道光十五

年（1835）の進士，翰林院編修。道光二十四年武鄉試校閱大臣。咸豐二（1852）年太平天国軍鎮圧の功により両広総督。咸豐六年（1856）‘アロー号事件’に端を發した英軍の侵攻に攻守を怠り咸豐七年（1857）十二月二十九日（11.14）広州陥落。捕虜となりカルカッタに連行されその地で病死した。

9) 扶乩／扶鸞，扶箕ともいう。五世紀ごろ始まり清代に全国的に普及した交霊術。吊るした筆や手で支えただけの木の棒が自動的に動き砂や線香の灰を敷いた盤上に文字や詩句や記号が描き出される。それを解釈し神霊からのメッセージとする。文字，詩文を媒介とすることで知識人にも歓迎され，民衆教化の役割も果たした。

10) 曾国藩／嘉慶十六年（1811）～同治十一年二月（1872. 3），湖南省湘郷出身。字滌生。道光十八年（1838）の進士。咸豐十年（1860）両江総督，同治九年（1870）直隸総督。太平天国軍鎮圧の功臣，洋務運動指導者，桐城派学者文人として軍事，政治，文芸界に君臨した。

李鴻章／道光三年（1823）-光緒二十七年（1901），安徽省合肥出身。字少荃。道光27年（1847）の進士。咸豐九年（1859），曾国藩の幕僚となり同治元年（1862）曾の推挙で江蘇巡撫，同治九年（1870）直隸総督兼北洋大臣。洋務運動の総帥，北洋陸海軍建設者として清末政治外交に権勢を揮った。同治十一年十一月一日（1872. 2）曾国藩と李鴻章は毎年三十名，四年間に百二十名の英才を留学させる旨の章程を上奏し容闈らを留学生監督にアメリカを留学先に決定する。

11) 伊里布／乾隆三十七（1772）～道光二十三（1843），満洲鑲黄旗人。字莘農。嘉慶6年（1801）の進士。道光20年（1840）両江総督。アヘン戦争勃発後浙江に赴き，妥協を画策し解任されるが翌年復職，耆英と共に南京条約を締結する。

琦善／乾隆五十五（1790）～咸豐四（1854），満洲正黄旗人。侯爵，大学士。字静庵。道光二十年（1840），英艦の天津攻撃の際の直隸総督。林則徐に代わり欽差大臣として広州で英軍との和議に応じ罷免された。

耆英／乾隆五十五（1790）-咸豐八（1858），満洲正藍旗人。字介春。道光二十二年（1842），欽差大臣となりアヘン戦争における全権として南京条約を締結する。同二十四年（1844）両広総督となりアメリカと望厦条約，フランスと黄埔条約を締結した。

牛鑾／？-咸豐八（1858），甘肅武威出身。字鏡堂。号雪樵。嘉慶進士。道光二十一年（1841）両広総督を拜命。英軍侵攻の際英艦の砲撃に遁走した。後に中英南京条約締結に関わった。

- 12) 葉名琛に纏わる逸話／『清朝野史大観』巻7 <葉名琛> <葉名琛迷信乩語> (1981. 6 上海書店版を使用), 『近代中国秘史』<葉名琛広州之變> (1987. 11 巴蜀書舎『清代野史』第5輯収録), 沈雲龍著『近代史事與人物』<葉名琛誤国貽羞> (民国60年3月文海出版社『近代中国史料叢刊』63輯) などに葉の扶乩に纏わる話題が収録されている。
- 13) 『中国秘史』／吳趼人が作中評語に引用。未見。
- 14) 「瞎騙奇聞」／<迷信小説> と称して『繡像小説』第41号 <光緒三十年(1904)十二月>～46号 <光緒三十一年(1905)二月> に連載, 全八回。算命師周鉄口は子供の欲しい富豪に子宝運のある年回りを予見し富豪の妻に妊娠を装わせ他人の子供をもらって産室に届ける。
- 15) 儒教道德の復活／「上海遊驂録」(十回) <跋文> (雑誌『月月小説』第6～8号 <光緒三十三年(1907)二月～四月> に連載) に以下のように記す。同4の版本を使用。

以仆之眼, 观于今日之社会, 诚岌岌可危, 固非急图恢复我固有之道德, 不足以维之, 非徒言输入文明, 即可以改良革新者也。